

学生まちづくり出前講座「まちづくり人にきく」

2009年5月22日(金)19時15分~20時30分
北海道大学工学部建築都市スタジオ棟1階 MUTSUMI ホール

<参加者一覧>

[学生]

北海道大学

工学部修士2年

4名

工学部学部4年

5名

工学部修士1年

3名

室蘭工業大学

工学部修士2年

1名

工学部学部4年

2名

[一般]

井田 直人(北海道工業大学准教授)

鈴木 裕二(株式会社JCB北海道支社)

[支部会員]

高橋 明男(未来図WORKS代表)

佐藤 敏雄(株式会社ドーコン総合計画部)

奈良 華織(北海道建設部まちづくり局都市計画課)

山重 明(株式会社ノーザンクロス)

[司会・進行]

後藤孝一郎(株式会社北海道日建設計)

学生まちづくり出前講座

2009/5/22

北海道大学工学部建築都市スタジオ棟 1 階

MUTSUMI ホール

後藤さん（家協会北海道支部幹事）：

ご歓談のところお集まりいただきありがとうございます。学生まちづくり出前講座を始めます。まずは回答者の皆様の自己紹介をお願いします。

山重さん（家協会北海道支部事務局長）：

私は、本を出版したり、田舎の商品開発をしたり、札幌での再開発をお手伝いしたりと幅広くいろいろな活動をしています。



奈良さん（家協会北海道支部幹事）：

道庁の都市計画課で景観政策の仕事をしています。都市計画家協会の会議に参加したのは初めてですがよろしくお願いたします。

高橋さん（家協会北海道支部副支部長）：

大学を卒業して、社会人になってからずっとまちづくりに関わっています。今は独立して以前から関わっていた帯広の再開発のプロジェクトに関わっています。

佐藤さん（家協会北海道支部幹事長）：

株式会社ドーコン総合計画部に所属しています。社会人になってから最初は東京に 20 年ほどいました。東京では過疎地の振興計画から横浜のハイテクパークまでそのような分野の仕事をしていました。その後ドーコンに来て、札幌駅の周辺や函館駅の開発、旭川の駅舎とか、宅地開発だとかに関わってきました。今現在はその流れで事業を仕掛けていく仕掛けづくりの話と、都市計画マスタープランをやっています。

後藤さん（家協会北海道支部幹事）：

本日は、主にこの 4 名の方々に学生の皆さんからの質問に答えてもらおうという企画です。よろしくお願いたします。

(学生からの質問)

単刀直入に都市計画のやりがいとはなんですか。例えば学生時代建築学科だった方も多いと思いますが建築よりも都市計画を選んだのはなぜでしょうか。その頃の志と現在の仕事とを併せてお聞きしたいです。

奈良さん：

昨年、入庁して12年目にしてようやく長年希望していた都市計画課に配属されました。しかし、今まででも何らかの形で都市計画には関わっていると感じていたので、どんな仕事をしていても都市計画とかまちづくりの仕事というのは生きるのではないかと思います。建築は選ばなかったのですが、建築とか都市計画とかという垣根はあまりないのではと思っています。

佐藤さん：

都市計画というのは、範疇からいうと、土地利用、都市施設、事業、そして少し地区計画がからんできます。最近はその範疇を超えていろいろなことやるのが都市計画になっています。都市計画の本流の仕事よりまちづくりとかたちでいろいろやっています。私がなぜ都市計画に進んだかということ、まだ夕張が元気だった頃、ニュータウンを作る計画があり、そのことに



ついて大学の研究室で皆であれこれ議論していたら、その様子を見た教授が「都市計画に向いている」と助言してくれたことが影響しています。なにもないところからどうやっていくかを考えて、それを実現に結びつけられるという、そのプロセスがとても面白いと感じています。

(学生からの質問)

都市計画やまちづくりといった幅広い分野において、具体的にどういった仕事を行っているのが、曖昧にしか捉えられていない面があります。

都市計画か建築か、どちらに行くか迷ったときにいろいろな話を聞きましたが、皆様にも具体的にどういうことをやっているのか聞きたいです。

山重さん：

もともと経済学部出身なので、全く都市計画だとかまちづくりには関わっていませんでした。どちらかということ、田舎で人々が生活するためにどのようなビジネスを興せるか、

高齢者の多い町にどのようにしたら若者が戻ってこられるか、というようなプロジェクトをやっていました。全くの素人でしたが、ただ、まちづくりも都市計画も相手にするのは地域社会とかそこに住んでいる人、あるいはその人々が背負ってきた思いだとか地域が継承してきた文化だとかそういった目に見えないものがあり、それを維持するために経済を興すことと、それを次の代に渡していくために地域の文化だとか伝統をまちづくりの観点からきちんとマネジメントしていくということが領域としては段々と重なってきていると感じています。ある意味都市計画だ建築だなんだかんだと領域を分けて考えても意味がないのでは。どこから入っても行き着く先は一緒です。

高橋さん：

都市計画でできることというのは、年代的に言うと僕の頃と今の学生さんたちとは随分違って来るし、全く違った体験をしていくのではないかと思います。都市計画は今のところハード的な事業を行うことで、それをどうやって住みながら“まちづかい”として使いこなそうか、みたいなのが“まちづくり”かなという概念で捕らえています。“まちづかい”とか“まちづくり”とかいう概念でいろいろなことをこれから考えていくほうが面白いと思います。



(学生からの質問)

都市計画以外の分野で今一番面白いと思うことは？

山重さん：

少年野球チームの指導者をやっているのですが、それがすごく面白い。今の子ども達は、自分の親以外の大人に触れる機会が少ない。それが、少年団などに入ると指導者などと触れ合う機会がある。ボランティア

の指導者達は、もちろん自分も好きだからやっているのですが、本当に地域の子どものことを大切に思っています。日本の地域社会というのはもともとこういうことがあって、人のために、人の子のために、地域のために、頑張ろうという気持ちはみんな持っていると思います。それがあまりシステム的に見えていないだけです。地域単位でいろんな人の持ち味を出すような公益事業はこれから増えると思います。

奈良さん：

今、一番仕事していて面白いのは、町の人と話しをしたり、まちづくりをやるといういろんな人に関わるのですが、そういった人がすごく生き生きとその視点からのまちづくりを考え

てくれることが一番面白いなと思っています。例えば、農業から都市計画やまちづくりを考えるというのもあるし、写真家の人が考えるとかいろいろなアプローチがある。自分の興味に着目して行って、そこから自分のできるまちづくりをしていくということでもいいのかなと思っています。

(学生からの質問)

巨大都市においては、そこに住む人と利用する人、双方が、必ずしも同じではないことがあります。例えば、東京で仕事をして埼玉などに帰る。というライフスタイルを持つ方が、多くいます。もし、こうしたビジネス街を計画するのであれば、住む人と利用する人、どちらに重点を置きますか。

実は、神戸市の両親が大阪に何時間もかけて通勤していて、「大阪に住めばいいじゃない」と言ったら、人があふれていてマンションも埋まっていて住むことができないといわれました。人口が多く集まる都市の中で、そういった都市計画というのはどういう風に考えられているのか知りたいです。

高橋さん：

巨大都市といってもいろいろな特性の都市がある。観光客など外から多くの人があるような資源が蓄積している地区、歴史的にも住居系で段々過疎化していった地区など特性の良し悪し、問題もあります。それをどう解決していくかひとつひとつ考えていくという手順が必要なのではないかと思います。

佐藤さん：

今は、まちなか居住などと言われますが、ただマンションを作って住んでもらえるかというやっぱりそうではないような気がします。神戸だったら海があり、山があり、もしかしたら庭がある、郊外部ではそういう生活が味わえるのです。今、まちなかに住んでまちなかライフを楽しめるかということ、今はまだプランナーがカバーできていない。まちなかライフを楽しめるようになるとそのほうがよいということになるのでしょうか。今、まちなかに住んでメリットがあるとしたら雪かきをしなくて良いとか、雨や雪にぬれずに通勤できるというようなことはあるが、そこに住んでいて楽しいということがまだ見出せない。これから都心できちんと都心ライフを満喫できるというのを考えていかなければならない。

(学生からの質問)

高齢化・環境問題などから自動車依存からの脱却が、近年最大のテーマになっています。自動車依存率の高い北海道で実現することは可能だと思われませんか。また、そのような未来を実現するために、現在行うべき都市計画は、こういったものなのでしょうか。

後藤さん：

環境問題と都市計画というときに、仕事の段階で実際に関わることはありますか。

山重さん：

環境問題の面からいって、自動車依存はこれからも問題であり続けるということはないと思っています。例えば、水素エネルギーの実用化も検討されています。自動車そのものから出てくる排気ガスというレベルでの環境負荷はハイブリッド車などが出てきて劇的に軽くなると思います。北海道の地域社会の交通から見て、自動車をもっと賢く使えるのではないかと思っています。例えば、地域にボランティア輸送特区を作ってその地域の人が高齢者の運転代行をしてあげるとシステムを取り入れている地域もあります。特別な車を使っているのではなく、自分の車を使っています。私財をパブリックに活用するという仕組みがこれからは出てくるでしょう。自動車もみんなが持つ必要はなく、CO2を排出しない車を中心に、カーシェアリングシステムを組めば劇的に問題はなくなると思っています。

（学生からの質問）

パブリックコメントが代表的ですが、住民参加がまちづくりに重要だと今言われていますが、そこで取り入れた住民の意見や意識だとかを実際にまちづくりに反映させる際に気をつけていることや工夫していることなどはありますか。

酒本さん（会場参加・家協会北海道支部会員）：

まず、コミュニケーション能力がないと都市計画やまちづくりをやることは難しいと思っています。私に関わる地域で都市計画について賛成派と反対派が真っ二つに分かれていたことがありました。まずは中立の立場をできるだけ確保して、それから、賛成の人と反対の人のそれぞれの言い分を聞きました。意見は平行線なのですが、なぜ賛成なの？なぜ反対なの？と最後まで聞いていくと、どちらもまちのためなのです。そこから考えましようとなる。必ずどこかに共通の意識があって、それを探してつないであげるといことをしています。

（学生からの質問）

都市計画設計というのをやっているのですが、計画の段階から大変で、実際にそれを運営していくのも大変じゃないかと思いました。僕達では想像がつかないようなこともあると思うのですが、そういった裏話があったら教えてください。

僕達は都市計画は人を幸せにするものだと思ってやっているのですが、それを阻む障害のようなものは何かと。

佐藤さん：

都市計画や都市計画事業という言葉は一般市民には伝わりづらい言葉です。市民の皆さんに話を聞いてもらうには“都市計画”といわないで、別な言葉で表現してまちづくりの話をするようにしています。今は、まちを活性化したり元気にしたりというときに都市計画はメインではなくなっています。まちづくりと都市計画の違いというのは、都市計画の場合は事業もありますが、規制誘導という形で官が主体のニュアンスが多いのですが、まちづくりという言葉はあきらかに行動論が入っています。“まちづかい”という言葉も先ほどありましたが、まちづくりとは、都市計画で作ったものをみんなで一緒に育てていく、使い続けて良いものにしていく、空間をよりよくしていくという行動が必ず伴います。行動を行政だけでやるわけにはいけないので市民の人たちに参加してもらって進めていかなければなりません。今はそれがメインです。しかし、いずれまた、市民行動だけでは様々な課題が解決できないという状況もうまれてくるのではないかと考えています。

後藤さん：

まちづくりをやるときの一番のモチベーション、理想に燃える原動力というのはなんだろうかとこの最後の質問にしたいと思います。



山重さん：

やはり人を幸せにできるからでしょう。地域社会とか地域に住んでいる人、例えば先ほども話した地域の少年野球の子ども

達の笑顔を見たら本当に幸せになります。子ども親も、子どもたちもきっとそう思っていると思います。少年野球チームのコーチをやっているのも大きな意味でまちづくり、また、地方に行ってまちの景観の作戦を練るのもまちづくりです。一緒にまちを考えてまちで活動していると、みんなで幸せになれることや笑顔を見ることで私も元気になります。そして、地域には長く関わっていかないと自分が関わった計画に責任が取れないとも思っています。その過程でいろんな人と仲良くなることもできます。特におじいちゃんおばあちゃんがとても良い笑顔をしてくれます。私が一番感動したのは、ある地区のまちづくりに20年ほど関わっているのですが、地域の地主さんで最初の協議会を作るときの発起人の方が亡くなったときに、その方の息子さんが「この土地は絶対売ってはならない。このまちづくりのために使って欲しい。使うときは必ず山重さんに相談するように」という遺言を持ってきてくれたのです。それは本当に泣きました。嬉しくて。そういう心が触れ合う関係になれるというのがまちづくりとか計画の一番すてきなところだと思います。そういうチャンスが皆さんにもあるはずなのです。都市計画でも建築でもどこから入っても相手

にするのは地域社会・人なので、入口はあまり気にせず先に進んでもらえばいろんな笑顔がみられると思います。都市計画は人が幸せになるためのものでなければいけないと思うし、そういうものになるはずなのです。

奈良さん：

モチベーションを持っている人に出会えることで、自分もモチベーションをもらえるというのが一番大きいです。今までで一番まちづくりをやっていて嬉しかったのは、道庁に入ってから支庁に異動があるのですが、そこはだいたい3年くらいでまた異動しますが、それじゃあその3年間でまちづくりはなにがやれるの？とそこに住んでいる人たちからすれば感じると思います。しかし、一生懸命まちづくり活動に関わらせてもらっているとだんだん地域の方と仲間になることができ、まちづくりをしている地元の人たちに、「奈良さんはこの町のことを愛していることがわかったよ。」とってもらえたことが非常に嬉しかったです。そういう想いをまた聞きたいと思いつつ仕事をしているというのがモチベーションです。

高橋さん：

学生の頃から漠然と都市計画の仕事につきたいと思って選んでやってきたのですが、自分のモチベーションは、やはりまちや地域や景色とかそういうものが好きで、自分にとって“気持ちいい空間”というものをいろんな人にもわかってもらえて感じてもらえるところをたくさん作りたいなと思ってきたのがモチベーションかなと思います。まちの中でも、観光地にいても、必ずしも自分の住んでいるまちじゃなくても、同じ北海道だ！同じ日本の中だ！といったような調子で、いろんな“気持ちいいところ”を作ることに関わりたい、それが一番のモチベーションでした。

それと、いま他の方も話しましたが地域の人たちとワイワイ言いながら共同作業をやるということが面白いし、これからも多分それが一番面白いと思います。

佐藤さん：

まずは自分自身が楽しいということだと思います。ただ楽しいだけではなくて、すごく苦労するけれど最終的に地域の人に喜んでいただいて、やってよかったと感じて自分の満足も最終的には得られる、その繰り返しだと思います。いろんな人から刺激を受けて、やって良かった、いい町になったと実感できる、その繰り返しがあってなのです。いろいろな人に会って、いろいろな人の話が聞けるという要素があればやっていける気はします。

ところで、前の会社で都市計画のコンサルタントとはこのような要素が必要です、会社ではこのようなことをやっていますよ、というペーパーを作ったことがあります。今日この会場にも持参していますので、コンサルタントを目指す方がいたら配布いたします。

後藤さん：

このような感じで都市計画家協会には皆さんに伝えたいことをたくさん持った専門家が多くいます。今日の出前講座はこれで終了としますが、言い足りないことや聞き足りないことはこの後も会食をしながら語り合ってください。

本日はありがとうございました。

